
赤子の声

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤子の声

【Nコード】

N8942P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中国宋代初期。赤子の声がする方に行つた者は帰らない。それは何故か。水滸伝の登場人物のご先祖様を出してみました。この人は実在の名将です。

第一章

赤子の声

中国宋代の話である。河南の山の麓にある村でだ。不気味な噂が
広まっていた。

「山に入った者が戻って来ない」

「どうということなんだ、これは」

「旅人が戻って来ない」

「それに獵師が入ってもだ」

「いなくなった」

村人達も不吉な顔をしてだ。そのうえで話をするのであった。

「何がどうなってるんだ」

「それにだ」

「ああ、それに？」

「何かあったのか？」

「俺聞いたんだけどな」

ここでだ。村人の一人が言ったのである。

「夜に山の方から聞こえるんだよ」

「何がだ？」

「何が聞こえるんだ？」

「赤ん坊の泣き声だよ」

それが聞こえるというのである。

「それがな。聞こえるんだよ」

「赤ん坊のか」

「それがか」

「ああ、聞こえる」

また言うのだった。

「今にも餓えそうな。そんな感じなんだよ」

「馬鹿言え、赤ん坊なんている筈がないだろ」

それはすぐに否定された。

「山の中にな」

「何でいるんだ？そんなの」

「赤ん坊なんているか」

「いるものか」

村人達はそれを何とか否定しようとする。絶対にだ。

だがそれでもだ。赤子が餓えそうと聞いてだ。そうしてだった。

「助けに行くか？」

「そうするか？」

「赤ん坊が餓えそうなら」

こう話してだ。どうするべきか迷いもした。山の中に入るべきか入るべきでないか。しかし今山に入って帰って来た者はいない。それが彼等を止めていた。

そんな中でだ。噂を聞いてか村にある男が来た。

かなりの大柄で頬髯が黒々としている。筋骨隆々としておりその背には二本の銅の棒の様なもの、所謂鞭を持っていた。その彼が来たのである。

彼は村に来るとだ。すぐに村人達に問うた。

「この山で怪異があると聞いたが」

「人が消えることでしょうか」

「それとも赤子の泣き声のことでしょうか」

「両方だ」

彼は険しい顔で村人達に答えた。その眉は太く目の光も強い。如何にも武人といった面持ちである。その彼がここで村人達に名乗った。

「我が名は呼延賛という」

「呼延賛様という」と

「確か將軍の」

「私の名前は知っているようだな」

その男呼延賛は彼等の言葉を聞いてだ。まずは頷いた。

「そうか、それなら話が早い」
「それでその呼延賛將軍が何の御用でこちらに」
「どうして来られたのですか？」
「話は他でもない」
「この村人達に答えたのだった。」
「この山のことだ」
「山っていいいますと」
「やっぱりあれですか」
「赤子の声のことですね」
「その通りだ。もうわかっている」
「こう話すのだった。」
「既にだ」
「わかっているといひますと」
「解決できるのですか」
「このことを」
「解決する為に来たのだ」
「呼延賛は胸を張って言った。」
「この村のことは皇帝陛下のお耳にも届いている」
「皇帝陛下にもですか」
「聖上にも」
「左様、既に届いておられる」
「こう話すのだった。この時の皇帝は宋の太宗である。その即位には色々噂がありそしてその他にも血縁者に対してよからぬ話もある。しかしそれでも彼は名君として有名ではある。」

第二章

「そしてわしがここに派遣されたのだ」

「左様ですか」

「それでなのですか」

「聖上直々に」

「勅命で来た」

また言う呼延賛だった。

「この騒ぎを終わらせる為にだ」

「では今から山にですか」

「入られるのですね」

「何ならついて来るといい」

呼延賛は村人達に対してこうも話すのだった。

「何ならな」

「山にですか」

「將軍と御一緒に」

「わしは誰にも倒されることはない」

これは自負であった。彼は宋きつての猛将でありその武勇は天下に知られている。その強さは宋の敵である遼にも恐れられているものなのだ。

「相手が誰であろうともだ」

「だからですか」

「それでは」

「ついて来るか」

また村人達に対して問う。

「それでいいか」

「はい、それでは」

「御願います」

こうしてである。呼延賛は村人達を連れてそのうえで山に入った。

山には緑の木々が生い茂り下には草がある。そして今もあれば小川もある。何処にでもあるような山だ。

しかしだ。村人達の顔が強張っている。そのうえで周囲を見回していた。

「今にも聞こえてきそうですね」

「そうだよな、あの声が」

「そこから」

「それを待っている」

先頭にいる呼延賛だけがだ。勇猛な顔で言うのだった。

「聞こえればそちらに行く」

「何かありますね」

「そこに」

「あるから行く」

また話すのであつた。そうしてだ。

遂に聞こえてきた。その声だ。

「聞こえたな」

「ああ」

「赤子の声だ」

「あつちだぞ」

「間違いない」

村人達は慌てふためいた顔でだ。山の頂上の方を指差してだ。そのうえであれこれと話してそのうえでさらに狼狽した顔になるのだつた。

「あつちにいるぞ」

「そうだな、そこにだ」

「いるな」

「そうだな」

呼延賛もその声を確かに聞いていた。そのうえで頷くのであつた。

「頂上の方に行くぞ」

「え、ええ」

「それじゃあ」

村人達は彼のその言葉に頷いてだ。頷いてそのうえで向かいだつた。彼等はそのまま上に向かいであつた。やがて目の前にであつた。

「！？何だありゃ」

「あの化け物は何だ？」

「動物じゃないな」

「やはりな」

その化け物はだ。身体は虎だつた。しかしその頭は人の頭だつた。禍々しい表情で赤い血走つた目をしてだ。口から鋭い牙を見せてきていた。

その化け物が一行に襲いかかろうとする。しかしだ。

呼延賛が前に出た。それと共に背にあるその二本の銅鞭を放つのであつた。

それで跳び掛かつてきた化け物の額を打つ。それでまずはその突進を止めた。

そこから激しい闘いがはじまつた。化け物はその牙と爪で呼延賛を倒さんとする。しかし彼はその鞭で化け物を何度も何度も打ち据える。そうしてだ。

一刻程経つとだつた。立っているのは呼延賛だつた。化け物が跳び掛かつたそこで身を翻し振り向きざまに首に鞭の一撃を入れたのだ。それで化け物は全身から血を流しそのうえで倒れた。彼の勝ちであつた。

第三章

「この化け物がですか」

「赤子の泣き声を出していたのですね」

「それでだったのですか」

「左様」

その通りだとだ。呼延賛は村人達に答える。見れば彼も肩や胸の鎧が傷ついている。鎧を着けていなければ危ないところであった。

「その通りだ」

「何故化け物がそんな声を」

「しかもこの名前は」

「何とこの名前はどうか」

「まず名前から言おう」

呼延賛はここから説明するのだった。

「この化け物の名前は馬腹という」

「馬腹ですか」

「そう言うのですね」

「そして人を食う」

このことも言うのであった。

「山海経という書にある。人を食う化け物なのだ」

「人を食う化け物がですか」

「この山に」

「どうしてこの山に入ったのかはわからん」

それはだというのだ。

「しかしだ。そうした化け物の特徴としてだ」

「赤子の声ですか」

「それですか」

「そういうことだ。人を食う化け物はその鳴き声を出す」

それを聞いてだ。村人達は余計に怪訝な顔になった。そうしてだ。

「人が気になるからですか」

「そしてそこに来たところを」

「食つと」

「そうであるうな」

呼延賛もそうではないかというのであった。

「とにかくだ。こうした化け物は赤子の泣き声を出すのだ」

「左様ですか」

「妙な化け物ですね」

「しかしこの化け物はわしが退治した」

その人の顔を持つ虎を見下ろしての言葉である。化け物は今は恐ろしい断末魔の顔で事切れている。死んでいるのは間違いない。

「だからだ。安心するのだ」

「はい」

「有り難うございます」

「この件は一件落着だ。しかしだ」

呼延賛はここだ。村人達に真面目な顔で述べるのだった。

「こうした化け物がいることは覚えておくようにな」

「山で赤子の泣き声がしたら」

「それは人を食う化け物の鳴き声ですか」

「山にそうそう赤子はいない」

呼延賛は今度はこの常識を指摘した。

「それも頭の中に入れておいてくれ」

最後にこう話してであった。彼は村人達と別れ宮廷に戻った。宋代初期の話である。正史にはないがこの英傑の話として残っているものである。化け物のこともである。

2
0
1
0
·
6
·
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8942p/>

赤子の声

2011年1月2日21時25分発行